

矢野大輔 + 池田俊一 + 東悟子

川面にうつる橋やお店の明かりの揺らぎが、人をリラックスさせ、街の夜の風景を豊かにするものであると思うのですが。

心の豊かさが叫ばれている今の時代、どうすれば川本来の姿を取り戻せるのか、真剣に考える必要があるのではないのでしょうか。日本橋川は、忘れられている東京の川の存在を、改めて感じさせてくれるいい場となりました。（東 悟子）

『神田川、三光景』

高架の街路灯がある日本橋川に対して、あたりが暗くなる神田川では三つの特徴的な光景が順に現れました。御茶ノ水、秋葉原、そして隅田川に出る直前に架かる柳橋です。

谷底のように切り立つ護岸の高く上のホームの蛍光灯に水面が照らされた御茶ノ水の川は、まるで舞台のようでした。活発な光を放つ電気街の建物立面のカラフルな鏡像が際立つ秋葉原の川は、遊園地のアトラクションのようです。日本橋川、神田川は両側を建物に挟まれて、川は建物の「裏」となっています。また地上よりも数メートル低い舟上は建物の裏しか見えない、あたりの様子が把握しにくい高さです。しかし御茶ノ水や秋葉原は、川側にもその場の特徴が現れていました。

柳橋の照明は手前の橋で隠れているときには派手で強く感じましたが、橋を歩く人にはそれほど強くは見えない設置方法、高さでした。低い舟上からの視点ならではの、光の映り込み効果でした。（峪田晴香）

『発光するレインボーブリッジ』

今回は川下りという一見変わった街歩きということで、とても期待していました。しかし当日は、あいにくの雨で、参加者全員雨具を着用してのツアー開始となってしまいました。それでも参加者はいつもとは違う視線の高さから見上げる東京の下町の光景に熱心にシャッターを切り、橋の上から覗き込む通行人に手を振ったりと、天気など気にもかけません。

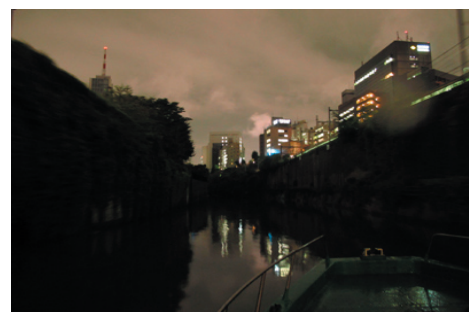
隅田川から台場へと抜ける境界にレインボーブリッジを見ました。雨のふる隅田川から見上げると、普段遠くから眺めるそ時とは違った印象を持ちます。東京の湾岸を遠くから眺めると高層マンションやビル群、東京タワー等、きらびやかな夜景にレインボーブリッジはきれいに馴染み込んでいる。けれど今日の雨の降る隅田川の暗い水上に立って下から見上げてみると、メタルハイドランプの白い光で下から照らされて真っ暗な闇の中に突然と姿を表した大きな発光体のようにも見えました。大きなシンボルをライトアップで効果的に見せるためには、周囲の明るさを抑えることによって色のコントラストや光の強弱で空間のメリハリを出すことが大切だと体感しました。（渡邊元樹）



水面を緑に染め上げ、長く伸びる柳橋の光。



水の賑わいをつくる橋のライトアップ。



建物の「裏」となり深い闇となっている神田川の一角。



思わず御茶ノ水駅のホームに向かって手を振る団員達。